

公民的分野における生徒の切実性を生む授業展開例

—「対立と合意」「効率と公正」×防災学習でALを実現—

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 後期課程 教諭 澤田 康介

1 はじめに

『社会科 中学生の公民』第1部第2章「現代社会をとらえる枠組み」の単元で主に取り上げられる事例は「ごみ置き場の掃除規則は変えられるか」「部活動での体育館の割り振りをどうするか」など、子どもたちにとって身近で話しやすい内容だと考えます。また、「対立と合意」「効率と公正」という概念は子どもたちにとって難しい言葉かもしれませんが、自然に意識していることもあります。例えば部活動の代表者会議において、どの部活動が週何回体育館を使用するのかを話し合う際に、どの部活動もなるべく均等に使えるようにするという考え方は、「効率と公正」の概念につながっています。

本稿では、「現代社会をとらえる枠組み」単元の実践例を提案します。具体的な事例をもとに、子どもたちの経験も踏まえながら「ルールづくりにどのような人たちが関わって決めているのか（手続きの公正さ）」「立場が変わってもその決定が受け入れられるか（機会や結果の公正さ）」「その決定にむだはないか（効率）」などの概念をとらえることを目指します。

2 授業の構成・展開

本単元では実社会で起こる具体的な場面や事例を取り上げるため、多くの子どもにとって自分の経験に引き付けて考え、身近に感じることができます。しかし、唐突に事例を与えたとしても子どもたちが自分事として考えることは難しいでしょう。そこで本実践では、子どもたちの切実性を生み、主体的に「どうすればよいか」を考えられるように工夫しました。

【活動1】実社会で発生した災害・想定される災害を共有することで切実性を生む

「共通点は何でしょうか？」と問いかけ、この授業を始めます。まず、毛布・アルミマット・ビスケット（乾パン）・アルファ米の順に4つの教材を提示します。提示すると同時に、子どもたちに共通点を予想させていきます。毛布やアルミマットを提示した段階ではキャンプ用品などの発言も出るかと思いますが、乾パンの時点で鋭い子は防災と関連していることに気付くかもしれません。

この4つの教材はすべて「防災備蓄倉庫」に入っている物だと伝えたくて、実際に起きた災害について触れていきます。過去に起きた大きな災害として2011年の東日本大震災、そして2024年に起きた能登半島地震は復興に向けた動きが始まったばかりです。災害は発生時のみ、私たちの生活に影響を与えるわけではありません。これまでも大災害と呼ばれる災害では、長期的にライフラインが途絶えたこともあります。こうした地震などによる被害想定について共有することで子どもたちの切実性を生み、図1の資料への足がかりにしていきます。

【活動2】「どこに防災備蓄倉庫を設置したらよいか？」をもとに、よりよいきまりを考える

活動1を通して、子どもたちは防災備蓄倉庫の役割や重要性について理解を深めたと思います。そこで、活動2では、防災備蓄倉庫の新設を考えていきます。図1を提示したうえで、以下のような条件と各地区の状況を確認します(表1)。

この地域では、人口の増加に伴い、防災備蓄倉庫を1つ新設することになりました。候補地は⑦～⑩で、どの地区も新設を希望しています。



図1 防災備蓄倉庫の新設を考えてみよう
『社会科 中学生の公民』p.17

表1 各地区の状況（『社会科 中学生の公民』p.17¹²の情報を踏まえて作成）

地区	現在の数	特徴
A地区	2	農地が多く、昔から住んでいる人が多い。高齢者の割合が高い。
B地区	4	一戸建ての多い住宅地。学校がある。地盤の固い高台にある。
C地区	1	まだまだ住宅開発が進む新興の住宅地。
D地区	3	マンションが多い。A～D地区で最も人口が多い。低い土地にある。

まず、自分だったらア～Iのどこに防災備蓄倉庫を新設するか記述する時間を確保したうえで、互いの考えを話し合う場面を設けます。この条件の下では、社会的弱者にあたる高齢者の多いA地区を優先すると、人口の多いD地区の人たちにとって不都合が生じるようになっていきます。しかし、互いに意見を述べただけでは、「対立」している現状に気付かなかつたり、複数の立場から考えたりできないことがあるため、単元のねらいを十分に達成できないことも予想されます。そこで、互いの考えを話し合う活動を行ったのちに、実際に防災備蓄倉庫を設置した例を取り上げます。校区や子どもたちが住むまちに防災備蓄倉庫が設置されている場合には、子どもたちはより身近に感じられます。こうした実例を通して「どのような場所に置いているのか?」「なぜその場所に置いているのか?」について考えることで、「効率と公正」などの本単元における見方や考え方を明らかにしてい

きます。

【活動3】「効率と公正」という見方・考え方をもとに再考する

活動3では、活動2で獲得した「効率と公正」という見方・考え方を働かせて、再び話し合う場面を設定します。「効率と公正」の視点を踏まえることに

より、前述した人口の側面のみならず、海岸沿いでの津波の危険性について考えるなど、地理的分野で学習した内容も踏まえて、より多面的・多角的な視点から合意に近づくために自分の考えを見つめ直すことができます。

3 おわりに

本単元で考える「対立と合意」は実社会においても重要な概念であり、子どもたちの生活にも身近な題材です。しかし、実社会では合意までにとっても長い時間がかかるケースもあり、合意することは身近でありつつも難しいものです。そのため、合意を前提としないことが大切です。合意を前提に話し合いを進めていくと、そこに至るまでのプロセスが充実せず、ジレンマを乗り越えるためにどうすればよいかについて考えることが難しくなってしまいます。

本実践では、教師側で子どもの立場を設定していませんが、A～D地区の代表者を決めてロールプレイング形式で話し合いを進める方法も有効です。子どもたち一人一人がじっくりと教材と向き合うなかで、悩み葛藤しながらも合意を導こうとする姿を引き出せるような展開を目指すことが大切です。

〈参考文献〉

- ・ 草原和博・川口広美編著 『学びの意味を追究した中学校公民の単元デザイン』 明治図書、2021
- ・ 橋本康弘編著 『中学公民 生徒が夢中になる!アクティブ・ラーニング&導入ネタ80』 明治図書、2016